国立国語研究所学術情報リポジトリ

Wh-word Positions in Old Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: オルドリッジ, エディス, ALDRIDGE, Edith メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000781

国語研プロジェクトレビュー
NINJAL Project Review　Vol.5 No.3 pp.122−134（February 2015）

〈客員教員の研究紹介〉

上代日本語における疑問詞の位置について

Wh-word Positions in Old Japanese

エディス・オルドリッジ（Edith ALDRIDGE）

1. 始めに

現代日本語と同様に上代日本語の基本語順は SOV（主語・目的語・動詞）である。以下，読み下しと現代語訳は日本古典文学全集からである。

（1） a. 和期於保伎美　余思努乃美夜乎　安里我欲比賣須　（MYS 4099）
わご大君　吉野の宮を　あり通ひ見す
「わが大君は吉野の離宮を絶えず訪れたまう。」
b. 安麻乎等女登母　多麻藻　可流　美由　（MYS 3890）
［海人娘子ども　玉藻　刈る］　見ゆ
「海女おとめらが玉藻を刈っているのが見える。」

これに対して，目的語が疑問詞である場合には，主語に先行することがある。この場合，主語は属格助詞「が」または「の」を取ることが多い。有情性のより高い名詞句（特に親族名称と 1，2 人称代名詞）に「が」が付く。

（2） a. 何物鴨　御狩人之　折而　将挿頭　（MYS 1974）
何をかも　み狩の人の　折りて　かざさむ
「何をいったい御狩人らは折って，髪にさすだろう。」
b. 何処従鹿　妹之　入来而　夢　所見鶴　（MYS 3117）
いづくゆか　妹が　入り来て　夢に　見えつる
「どこからあなたは忍び込んで，夢に見えたのですか。」
c. 誰手本乎可　吾　将枕　（MYS 439）
誰が手本をか　我が　枕かむ
「誰の手枕を私はしようか。」

Whitman（2001），Watanabe（2002），渡辺（2005），Aldridge（2009）は，（2）に示す語順を目的語の移動による結果として捉えている。疑問助詞「か」が付いた目的語は，動詞句内

の元位置から属格主語の前へ移動する。

(3) 誰手本乎可　　吾　　[$_{VP}$ __ 将枕]　　(MYS 439)
　　誰が手本をか　　我が　　[$_{VP}$ __ 枕かむ]

ただし，この移動先の着地点に関しては，論説が分かれている。上代日本語の疑問詞移動を英語の WH 移動と同様に捉える Whitman（2001），Watanabe（2002），Schaffar（2002），渡辺（2005）は，着地点を文頭にある CP 指定部としている。これに対して，Aldridge（2009）は，上代日本語の WH 移動を焦点移動として分析し，その着地点が文中（TP 内部）にあると提案する。本論では，Aldridge（2009）の分析を概括し，着地点が TP 内部にあることを支持する新たな根拠を提供したいと思う。

2. 疑問詞と主語の相対的位置

本節では，Aldridge（2009）の論説を簡単に紹介する。その前に，Aldridge の提案と関連する上代日本語における疑問詞疑問文のいくつかの特徴を紹介しておく。

2.1 上代日本語の疑問文の特徴

現代日本語と違って上代語においては，主節の動詞に付く終止形と，関係節のような準体句における動詞に付く連体形が区別されている。文中に焦点または疑問を表す「ぞ」,「なむ」,「や」,「か」という係助詞が用いられる場合，主動詞は連体形を取る。こうした係助詞と動詞の間の関係は一般に「係り結び」と呼ばれている。連体節の主語も主格ではなく，属格を取ることが多い。なお，第 1 節で触れておいたように，係助詞が付いた要素は属格主語に先行する。

(4) a. 大宮人之船　　麻知兼**津**　　(MYS 30)
　　大宮人の舟　　待ちかね**つ**（終止形）
　　「昔の大宮人の舟はいくら待っていても来ない。」
　　b. 奈何**鹿**　　使**之**　　来**流**　　(MYS 629)
　　なにすと**か**　　使ひ**の**　　来**つる**（連体形）
　　「何のために使いをよこしたのか。」

最初にこの語順制約に注目したのはおそらく野村（1993a, b）である。野村は「か」が現れる疑問文における語順を次のようにまとめている。先ほど述べたように，疑問詞疑問文における主語は，属格を取り疑問詞に後続することが多い。これに対して，無助詞で示す主格の主語，または「は」が付いた主題が文中に現れることも可能であり，疑問詞は大抵これらの要素に後続する。

（5）　上古語の語順制約（野村 1993a, b）
NP（ハ）…XP カ…NP ノ・ガ…V（連体）

疑問詞が主題（6a, b）と無助詞主語（6c）に後続する例を以下に示す。

（6）　a.　山菅〈之〉　實不成事乎　吾尓所依　言礼師君**者**
山菅の　実成らぬことを　我に寄そり　言はれし君**は**
与孰**可**　宿良牟　（MYS 564）
たれと**か**　寝らむ
「（山菅の）実のないことを，わたしに関係づけて，言い立てられた君は，ほんとは誰と寝ているのだろうか。」
b.　之母都家野　美可母乃夜麻能　許奈良能須　麻具波思兒呂**波**
下毛野　三毳の山の　こ楢のす　まぐはし児ろ**は**
多賀家**可**　母多牟　（MYS 3424）
誰が笥**か**　持たむ
「下野の三毳の山の小楢のように，きれいなあの娘は，誰に嫁ぐだろうか。」
c.　羽振鳴　志藝　誰田尓**加**　須牟　（MYS 4141）
羽振き鳴く　鴫　誰が田に**か**　住む
「羽ばたき鳴く鴫は，誰の田に住むのか。」

目的語が属格主語に先行する語順は移動の結果として捉えることができる。その根拠として，Yanagida（1995）と Whitman（2001）は，「島」制約への敏感性を挙げている。具体的には，外側への移動を許さない関係節または付加詞節である「島」の内部にある構成素に疑問助詞「か」が付かないことを指摘している。「か」は必ず「島」の外側に付き，その内部にある疑問詞は裸で元位置に現れる。

（7）　a.　［和伎毛故我　伊可尓　於毛倍］**可**　奴婆多末**能**
［我妹子が　いかに　思へ］**か**　ぬばたま**の**
比登欲毛於知受　伊米尓之美由流　（MYS 3647）
一夜も落ちず　夢にし見ゆる（連体形）
「いとしい妻がどう思ってか，（ぬばたまの）一夜も欠けず，夢に見えることだ。」
b.　天飛也　［鴈之翅乃覆羽之　何處　漏］**香**
天飛ぶや　［雁の翼の覆ひ羽の　いづく　漏りて］**か**
霜之　零異牟　（MYS 2238）
霜の　降りけむ
「空を飛ぶ雁の翼の覆い羽のどこから漏れて，霜が降ったのだろう。」

「か」が付く要素が移動すると想定すれば，外側への移動を許さない関係節や付加詞節のような「島」の内部に「か」が現れないことが説明できる。すなわち，「か」が「島」の内部にある要素について，その移動を強制したら，付加詞条件のような「島」制約に違反することになるのである。

（8）　付加詞条件 ── 付加詞の内部から移動はできない。

（9）　*…　［雁の翼の覆ひ羽の　［いづく**か**］　漏りて］　…

2.2　着地点

Watanabe（2002），渡辺（2005）は，上代日本語における疑問詞＋「か」の移動を英語のWH移動と同じように分析する。英語の疑問詞はTP外部のCP指定部に移動する。疑問詞が目的語である場合には，移動の結果としてTP指定部にある主語に先行することになる。

（10）　a.　She bought a book.
　　b.　What did she buy?
　　c.　$[_{CP}$ What [did　$[_{TP}$ she　$[_{VP}$ buy __]]]]

渡辺は，上代日本語における「が」格の主語に先行する疑問詞も同様に，CP指定部の位置を占めていると想定する。

（11）　誰手本乎可　吾　将枕　（MYS 439）
　　$[_{CP}$ 誰が手本をか　$[_{TP}$ 我が　$[_{VP}$ __ 枕かむ]]]

ただし，この提案にはいくつかの問題点がある。第一に，「が」と「の」は上代日本語において主格助詞ではなく，属格助詞であった。「が」は（12a）に示すように，通常名詞句内部の所有者に付く。「の」は，現代日本語と同様に名詞句内の修飾要素に付くことが多い。

（12）　a.　［和**何**世古］我　［多那礼**之**美巨騰］　都地尓意加米移母　（MYS 812）
　　［我**が**背子］が　［手馴れ**の**み琴］　地に置かめやも
　　「あなたがお気に入りの琴は粗末にしましょうか。」
　　b.　都祢斯良農　［道**乃**長手］袁　久礼々々等　伊可尓可　由迦牟　（MYS 888）
　　常知らぬ　［道**の**長手］を　くれくれと　いかにか　行かむ
　　「行き馴れぬ遠い旅路を暗い心でどうして行こうか。」

「が」と「の」が主語に付く場合もあるが，これは名詞化節（すなわち準体句）である関係節や係り結び構文に現れる連体節の場合が殆どである。

（13） a. ［大夫**之**　弓上　振起射都**流**］矢　（MYS 364）
［ますらを**の**　弓末　振り起こし射つ**る**（連体形）］矢
「ますらおが弓末を振り立てて今射た矢」
b. ［世人**之**　貴慕］七種之　寶　（MYS 904）
［世の人**の**　尊び願ふ］七種の　宝
「世の人が貴び愛でる七種の宝」

終止形で終わる主節の主語は，「の」や「が」格を含めて格助詞を取らず，主格を表す裸の名詞句として現れる。

（14） a. **和期於保伎美**　余思努乃美夜乎　安里我欲比賣須　（MYS 4099）
わご大君　吉野の宮を　あり通ひ見す
「わが大君は吉野の離宮を絶えず訪れたまう。」
b. **烏梅能波奈**　伊麻佐可利奈理　（MYS 820）
梅の花　今盛りなり（終止形）
「梅の花は今満開だ。」

この無助詞の主格主語の位置も渡辺にとってもう 1 つの問題点である。野村（1993a, b）の指摘の通り，無助詞主語は大抵疑問詞＋「か」に先行する（（6c）も参照）。

（15） a. 保等登藝須　奈尓**加**　伎奈可奴　（MYS 4053）
ほととぎす　なに**か**　来鳴かぬ
「ほととぎす，なぜ来鳴かぬのか。」
b. 羽振鳴　志藝　誰田尓**加**　須牟　（MYS 4141）
羽振き鳴く　鳴　誰が田に**か**　住む
「羽ばたき鳴く鳴は，誰の田に住むのか。」

英語と同様に，主格主語の位置を TP の指定部と想定すれば，疑問詞の位置は TP 内部にあることになる。Aldridge（2009）は，上代日本語の WH 移動の着地点は T と *v*P の間にある焦点位置であると提案する。

（16） 羽振鳴　志藝　誰田尓**加**　須牟（MYS 4141）
［$_{TP}$ 羽振き鳴く　鳴　［$_{FocP}$ 誰が田に**か**　［$_{vP}$ …＿ 住む ］］］

ここで，疑問詞が属格主語に先行する（11）のような例を説明する必要があるが，これに当たって Aldridge（2009）は，属格主語の位置を *v*P（連体節）内部にある元位置とする Yanagida（2006）の提案を取り入れている。その根拠は，属格主語が必ず「を」格を取る目的語に後続することである。柳田は，連体節において属格主語に後続する目的語は（17a）のような不特定の指示をもつもののみだと指摘し，（17b）に示すような特定の目的語は，*v*P の外部指定部に移動すると提案する。したがって，目的語に後続する主語は *v*P 内部に残っていると想定できるのである。

（17） a. 佐欲比賣能故**何** 比列 布利斯 夜麻 （MYS 868）
[$_{vP}$ 佐用姫の児**が** [$_{VP}$ 領巾 振りし]] 山
「佐用姫が領巾を振ったこの山」

b. 伎美乎 安**我** 麻多奈久尓 （MYS 3960）
[$_{TP}$ … 君を [$_{vP}$ 我**が** [$_{VP}$ __ 待たなくに]]]
「あなたをわたしは待ったのではないよ。」

属格主語が *v*P 内部の元位置に残るとすれば，疑問詞が TP 内部の焦点位置に移動しても，主語に先行する結果になることを Aldridge（2009）は指摘している。

（18） 誰手本乎可 吾 将枕 （MYS 439）
[$_{TP}$ [$_{FocP}$ 誰が手本をか [$_{vP}$ 我が [$_{VP}$ __ 枕かむ]]]]

Aldridge の提案をまとめると，上代日本語における疑問詞の位置は TP 内部の焦点位置であり[1], *v*P 内部に結合される疑問詞＋「か」はその位置に移動するということになる。これにより，文中の他の要素との相対的位置も説明できる。焦点位置が主語位置の TP 指定部と主題の位置である CP 指定部より低いので，疑問詞＋「か」はこれらの要素に後続することになる。

（19） [$_{CP}$ XP_{Top} [$_{TP}$ DP_{NOM} [$_{FocP}$ YP カ [$_{vP}$ DP_{GEN} [$_{VP}$ …V]]]]]

TP 内部の焦点位置を裏付けるもう 1 つの根拠として，Aldridge（2009）は 2 つの疑問詞または焦点句が現れる例を挙げている。（20）に示すように，2 つの焦点のうちより低い位置にあるものに「か」が付く。より高い位置を占める要素が TP 外部の焦点位置にあると想定

[1] Yanagida（1995）も日本語の TP 内に焦点位置があると主張している。

しても，「か」が付いた要素の位置は必ず TP 内部にあることになる。

（20） a. 吾思君者　[$_{CP}$ [$_{FocP}$ **何処辺**　[$_{TP}$ 今夜　[$_{FocP}$ 誰与**可** …]]]]
我が思ふ君は　**いづく辺に**　今夜　誰と**か**
雖待不来　（MYS 3277）
待てど来まさぬ
「わたしが思う君は，どのあたりで今夜誰と寝て，待っても来ないのだろう。」
b. 霍公鳥　**伊頭敝**能山乎　鳴**可**　将超　（MYS 4195）
ほととぎす　**いづへ**の山を　鳴き**か**　越ゆらむ
「ほととぎすは，どこらの山を鳴いて越えているのだろう。」

3. 項と付加詞の非対称性

（19）の分析が正しいとすれば，元位置が *v*P 内部にある要素（例えば動詞の項）は焦点位置に移動するが，FocP より高い位置に結合される付加詞は元位置に現れることが予想される。本節において，項と付加詞との相対的な位置を検討し，予想通り多くの場合において付加詞が項より高い位置を占めることが分かる。

「を」格目的語との相対的位置を比較すると，項と付加詞の疑問詞＋「か」の非対称性がよく分かる。主語（つまり項の一種）である疑問詞は必ず目的語＋「を」に後続する。

（21） a. 吾待君**乎**　誰　留流　（MYS 2617）
我が待つ君**を**　誰**か**　留むる
「わたしが待っているあの人を，誰が引き留めているのだろう。」
b. 伊敝尓之底　由比弖師比毛乎　登吉佐氣受　念意**緒**
家にして　結ひてし紐を　解き放けず　思ふ心**を**
多礼賀　思良牟母　（MYS 3950）
誰**か**　知らむも
「家で妻が結んだ紐を解き開けずに思っている心を誰が知ろうか。」

しかし，疑問詞が付加詞である場合には，目的語＋「を」に先行すること（22）も後続すること（23）もある。

（22） a. **如何**　獨　長夜**乎**　将宿　（MYS 462）
いかにか　ひとり　長き夜**を**　寝む
「どんなにしてひとりで秋の夜長を寝たものであろうか。」
b. **伊都斯可母**　京師**乎**　美武等　（MYS 886）
いつしかも　都**を**　見むと思ひつつ

「今すぐにも都を見たいと期待して」[2]

（23） a. 都祢斯良農　道乃長手**袁**　久礼々々等　**伊可尓可**　由迦牟（MYS 888）
常知らぬ　道の長手**を**　くれくれと　**いかにか**　行かむ
「行き馴れぬ遠い旅路を暗い心でどうして行こうか。」
b. 多都多能山**乎**　**伊都可**　故延伊加武　（MYS 3722）
竜田の山**を**　**いつか**　越え行かむ
「竜田の山をいつ越えられようか。」

ところで，目的語＋「を」の位置は割合自由である。（24）の例においては，目的語は主題または主格主語に後続する。

（24） a. 吾衣於君令服与登　**霍公鳥**　吾**乎**　領　（MYS 1961）
我が衣君に着せよと　**ほととぎす**　我**を**　うながす
「この衣を君に着せよと，ほととぎすがわたしにせつく。」
b. **和期於保伎美**　余思努乃美夜**乎**　安里我欲比賣須　（MYS 4099）
わご大君　吉野の宮**を**　あり通ひ見す
「わが大君は吉野の離宮を絶えず訪れたまう。」
c. 人皆**者**　芽子**乎**　秋云　（MYS 2110）
人皆**は**　萩**を**　秋と言ふ
「人は皆萩を秋と言う。」
d. 氣緒尓吾念君**者**　鶏鳴東方重坂**乎**　今日可　越覧（MYS 3194）
息の緒に我が思ふ君**は**　鶏が鳴く東の坂**を**　今日か　越ゆらむ
「命がけでわたしが思う君は，（鶏が鳴く）東国の坂を今日越えていることだろうか。」

しかし，目的語が主語や主題に先行する例もある。

（25） a. 許乃久礼能之氣伎乎乃倍**乎**　**保等登藝須**　奈伎弖故由奈理　（MYS 4305）
木の暗の茂き峰の上**を**　**ほととぎす**　鳴きて越ゆなり
「木の下闇の茂った尾根を，ほととぎすが鳴いて越えている。」
b. 八多篭良我夜晝登不云行路**乎**　吾**者**　皆悉　宮道叙為（MYS 193）
はたこらが夜昼といはず行く道**を**　我**は**　ことごと　宮道にぞする
「役民たちが夜昼となく，行く道をわれわれ舎人はみんな，宮仕え道にしている。」

[2] 「イツシカ…ムという文は，本来，いつになったら～できるようになるだろうか，という内容の疑問文であるが，文脈の上からは，早く～したい，早く～してほしい，というような願望や希求の気持を含んでいると思われる。」（日本古典文学全集 2，92 頁，886 の注釈）

（24）と（25）の違いについては，現代日本語と同様に上代語においても目的語の移動が比較的に自由であり，いくつかの着地点に移動することが可能だと想定すればよい。

（26）　[$_{TopP}$ NP ＋ハ __ [$_{TP}$ NP __ [$_{FocP}$ NP ＋カ [$_{vP}$ NP ＋ガ [$_{VP}$ NP ＋ヲ　V]]]]]

ただし，項と付加詞の疑問詞の非対称性は目的語の移動だけでは説明できない。目的語＋「を」は，付加詞の疑問詞に後続することができるのに対して，主語の疑問詞に後続することはない。言い換えれば，付加詞の疑問詞に後続する「を」格目的語の位置があるのに対して，項の疑問詞に後続する「を」格目的語の位置はないわけである。

（27）　a.　吾待君**乎**　　誰　　留流　　（MYS 2617）
　　我が待つ君**を**　　誰**か**　　留むる
　　「わたしが待っているあの人を，誰が引き留めているのだろう。」
　　b.　何尓**可**　　君之三船**乎**　　吾　　待将居　　（MYS 2082）
　　いづくに**か**　　君が御舟**を**　　我が　　待ち居らむ
　　「どこで君の御舟をわたしは待っていればよかろうか。」

明らかに，項と付加詞の疑問詞の非対称性は，項と付加詞の疑問詞が占める位置が違うということを示唆している。すなわち，元位置が *v*P 内部にあるとされる項は焦点位置に移動するが，焦点位置より構造的に高い位置に結合される付加詞は元位置に残ると想定すればよいわけである。「を」格目的語との相対的位置に関しては，（28a）に示すように，焦点位置にある主語の疑問詞＋「か」は移動した目的語に後続することになる。これに対して，（28b）に示すように，FocP より高い位置を占める付加詞の場合には，目的語はその後ろにも前にも移動することができる。

（28）　a.　[$_{TP}$ … NP＋ヲ … [$_{FocP}$ NP＋カ [$_{vP}$ __ [$_{VP}$ __ V]]]]

　　b.　[$_{TP}$ … __ （XP＋カ）… __ [$_{FocP}$ [$_{vP}$ NP＋ガ [$_{VP}$ NP＋ヲ V]]]]

もし Watanabe（2002），渡辺（2005）が提案するように，焦点位置が TP 外部にあるとすれば，項の疑問詞も付加詞の疑問詞もこの位置に移動することになり，「を」格目的語が主語＋「か」に後続できないことは説明できなくなる。

(29) a. [$_{CP}$ NP＋カ [$_{TP}$ … NP＋ヲ … [$_{vP}$ __ [$_{VP}$ …]]]]

b. [$_{CP}$ XP＋カ [$_{TP}$ … NP＋ヲ … __ [$_{vP}$ NP＋ガ [$_{VP}$ …]]]]

したがって，上述の項と付加詞との非対称性は，本論で提案してきたTP内部にある焦点位置を裏付けるもう1つの根拠になるわけである。

4. 比較的観点から

第3節では，WH移動の着地点がTP内部にあることを裏付ける項と付加詞の疑問詞の位置の非対称性を観察した。本節では，古代中国語においても，TP内部のWH移動によって生じる，同じような非対称性があることについて触れておきたいと思う。

上代日本語と同様に，古代中国語もTP内のWH移動があった。現代中国語と同様に古代中国語の基本語順はSVOであるが，目的語が疑問詞である場合には動詞の前へ移動しなければならない。

(30) a. 吾　**誰**　欺__？　欺　天　乎？　（論語・子罕）
Wu　shei　qi?　Qi　tian　hu?
「吾誰か欺かむ。天を欺かむか。」

b. 其　子　**焉**　往__？　（孟子・離楼上）
Qi　zi　yan　wang?
「其の子，いづくにか往かむ。」

興味深いことに，疑問詞が主語である場合と目的語である場合の位置は単一ではない。目的語の疑問詞はモーダル副詞「將」に後続するが，主語の疑問詞は「將」に先行する。

(31) a. 我　將　**何**　求？　（左傳・僖公28）
Wo　jiang　he　qiu?
「われ，何か求むる。」

b. **誰**　將　治　之？　（宴子春秋13）
Shei　jiang　zhi　zhi?
「誰か治むる。」

Aldridge（2010）は，目的語のWH移動の着地点をTP内部にある焦点位置と想定すれば，主語と目的語の非対称性が説明できると主張する。すなわち，主語は主格が付与されるTP指定部に移動しなければならないので，*v*P内部の元位置に残ることもできないし，焦点位

置に移動することもできない。したがって，「將」に先行することになるわけである。

(32) a. [$_{TP}$ 我　將 [$_{FocP}$ 何　[$_{vP}$ __ [$_{VP}$ 求 __]]]]

b. [$_{TP}$ 誰　將 [$_{vP}$ __ [$_{VP}$ 治之]]]

こうして，古代中国語における主語と目的語の非対称性も上代日本語における項と付加詞の非対称性と同じように説明できるわけである。なお，両言語の間の相違点に関しては，それぞれの言語における主語の認可の要求の違いによる結果として捉えることができる。上代日本語における主語は，古代中国語と違って，*v*P 指定部である元位置に残って属格を付与されることが可能であるから，必ずしも主語位置の TP 指定部に移動しなくてもよい。したがって，主語の疑問詞は元位置から焦点位置へ移動することができるわけである。

5. まとめ

本論では，上代日本語にある二種類の疑問詞の位置を提案した。動詞の項（主語または目的語）が疑問詞である場合には，*v*P 内部にある元位置から TP 内部にある焦点位置に移動すると想定する。

(33) a. [$_{TopP}$ … (XP) … [$_{TP}$ … (XP) … [$_{FocP}$ NP + カ [$_{vP}$ NP + ガ [$_{VP}$ __ V]]]]]

b. [$_{TopP}$ … (XP) … [$_{TP}$ … (XP) … [$_{FocP}$ NP + カ [$_{vP}$ __ [$_{VP}$ … V]]]]]

これに対して，元位置が *v*P 外部にある付加詞である疑問詞は，移動しないで，元位置に残る。

(34) [$_{TopP}$ … (XP + カ) … [$_{TP}$ … (XP + カ) … [$_{vP}$ NP + ガ [$_{VP}$ …]]]]

●略語一覧●

CP　complementizer phrase（補文標識句，主題や疑問詞の位置を含む節）
GEN　genitive（属格）
FocP　focus phrase（焦点句）
MYS　『萬葉集』
NOM　nominative（主格）

Top　topic（主題）
TP　tense phrase（時制句，主語位置を含む節）
VP　verb phrase（動詞句，動詞と内項の元位置を含む句）
*v*P　*v* phrase（軽動詞句，外項の元位置を含む二階建ての動詞句）

●参照文献●

Aldridge, Edith（2009）Short *wh*-movement in Old Japanese. In: Shoichi Iwasaki, Hajime Hoji, Patricia Clancy, and Sung-Ock Sohn（eds.）*Japanese/Korean linguistics*, volume 17, 549−563. Stanford: Center for the Study of Language and Information.

Aldridge, Edith（2010）Clause-internal *wh*-movement in Archaic Chinese. *Journal of East Asian Linguistics* 19(1): 1−36.

小路一光（1988）『萬葉集助詞の研究』東京：笠間書院.

野村剛史（1993a）「上代語のノとガについて（上）」『国語国文』62(2): 1−17.

野村剛史（1993b）「上代語のノとガについて（下）」『国語国文』62(3): 30−49.

Schaffar, Wolfram（2002）Kakarimusubi, *noda*-constructions, and how grammaticalization theory meets formal grammar. In: Noriko Akatsuka and Susan Strauss（eds.）*Japanese/Korean linguistics,* volume 10, 320−333. Stanford: Center for the Study of Language and Information.

Watanabe, Akira（2002）Loss of overt *wh*-movement in Old Japanese. In: David Lightfoot（ed.）*Syntactic effects of morphological change*, 179−195. New York: Oxford University Press.

渡辺明（2005）『ミニマリストプログラム序説』東京：大修館書店.

Whitman, John（2001）Kayne 1994: p. 143, fn. 3. In: Galina Alexandrova and Olga Arnaudova（eds.）*The Minimalist parameter: Selected papers from the open linguistics forum, Ottawa*, *21−23 March 1997*, 77−100. Amsterdam: John Benjamins.

Yanagida, Yuko（1995）Focus projection and *wh*-head movement. Unpublished doctoral dissertation, Cornell University.

Yanagida, Yuko（2006）Word order and clause structure in Early Old Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 15: 37−67.

●一次資料●

山口大学教育学部 万葉集検索 (ver 2.2.0)
http://infux03.inf.edu.yamaguchi-u.ac.jp/~manyou/ver2_2/manyou.php

『萬葉集 一』日本古典文学全集 2，第四版，1976 年，小学館
『萬葉集 二』日本古典文学全集 3，第九版，1979 年，小学館
『萬葉集 三』日本古典文学全集 4，第六版，1979 年，小学館
『萬葉集 四』日本古典文学全集 5，第五版，1979 年，小学館

《要旨》 現代日本語と違って，上代日本語の疑問詞は，一定の条件下において主語に先行することを義務付けられていた。本論は，従来の研究と同様に，この語順を WH 移動の結果として捉える。ただし，移動先の着地点に関しては，英語の場合と同じ CP 指定部ではなく，文中（TP 内部）にある焦点位置であると提案する。その根拠の 1 つとしては，疑問詞が先行する主語は，TP 指定部にある主格主語ではなく，*v*P 指定部にある属格主語のみであることを指摘する。TP 内の焦点位置を裏付けるもう 1 つの根拠としては，項と付加詞との相対的位置を挙げる。*v*P 内部に結合される項は移動するのに対し，*v*P の外側に結合される付加詞は，移動の対象にならず，元の位置に現れる。

Abstract: In contrast to modern Japanese, *wh*-phrases in Old Japanese were often required to precede the subject of the clause. This paper follows previous accounts in analyzing this word order as the result of *wh*-movement. However, I argue that the landing site is not [Spec, CP], as is the case in English, but rather a TP-internal focus position. I provide evidence first from the fact that *wh*-phrases typically precede only genitive subjects located in [Spec, *v*P] and not nominative subjects in [Spec, TP]. I also show how the proposal accounts for an asymmetry between argument and adjunct *wh*-phrases. Arguments appear in the focus position just above *v*P, clearly suggesting that they have moved to this position. On the other hand, high adjuncts, which are not base generated within the c-command domain of the focus head, do not move to the focus projection but rather appear in their base positions outside of *v*P.

エディス・オルドリッジ（Edith ALDRIDGE）

ワシントン大学シアトル本校言語学科准教授。国立国語研究所言語対照研究系客員教授（2014 年 4 月～ 8 月）。博士（言語学）（コーネル大学）。

主な論文：Survey of Chinese Historical syntax, parts I & II（*Language and Linguistics Compass* 7（1-2）, 2013）, Analysis and value of *hentai kambun* as Japanese（*Japanese/Korean Linguistics,* Volume 20, CSLI, 2013）, Clause-internal *wh*-movement in Archaic Chinese（*Journal of East Asian Linguistics* 19（1）, 2010）, Short wh-movement in Old Japanese（*Japanese/Korean Linguistics,* Volume 17, CSLI, 2009）, *Hentai kambun* perspective on short scrambling（*Journal of East Asian Linguistics* 10（2）, 2001）.